
ユメウタ

大希

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメウタ

【Nコード】

N0834D

【作者名】

大希

【あらすじ】

22、その時好きになった人は結婚していた。不倫も愛人も恋人もそんなに違わないと思っていた。啓志はそう思わせなくらい愛してくれていたのかもしれない。でもね、三度目の夏、私は気づき始めてしまったんだ。気づいてはいけない、知らなかったほうが良かったのかもしれない。先生と出会って過ごした夏がはじまる。

季節：夏　　海

夏

「先生、今日どこ行くの？」

「江ノ島行っちゃう？」

「行く行くー！」

「海でサッカー！」

「花火大会は？」

「海ですればいいじゃん。」

「まだ売ってないんじゃない？」

「いーから、江ノ島決定！」

「車へゴー！」

「乗り込め詰め込め！」

いつも皆で遊んでいた。

多勢で遊んでいる中の一人。

今年で三年目の夏が来る。

「到着ー！」

「海だあー！」

「寒っっ！」

「誰もいないー！」

六月の海。江ノ島。

最近江ノ島で一人暮らしを始めたリッキー。
リッキーと海で遊ぶことが増え始めた。

「先生ー、ラーメン食べたい！」

「俺も」

「私も」

「よし、じゃあ限定5名だけな。」

「はいはい！」

「行きます」

「食べます」

「では今手を挙げた5名のみ、ラーメン屋へ移動開始！残り2名は海で待つこと！」

「はいっ！」

突然ラーメンを食べに行ってしまった5名。

海で食べようとお菓子や飲み物も買っていたのに。

変なの・・・

そう思ったけれど別にラーメンが好きではないからまあいいか。

皆で買ったおつまみに手を伸ばしながらビールを片手に海を見てた。

するともう一人残った加藤くんに話しかけられた。

「佐岐さんって彼氏いるんですか？」

「は？」

「す、すみません。突然・・・。」

「いや、いないけど。」

「そ、そうなんですか。」

「彼氏」はいない。

嘘をついたわけではないが胸が痛む言葉。

彼氏・・・か。

彼氏にはなってくれないけれど交際しているお相手ならいる。

そう言った方が良かったかな。

つまり、不倫愛人関係ね。

いや、言えないだろう。

言えるわけがない。
言えるわけがない。

だって加藤くん、君の元上司なのだから。

「佐岐さんは、年上と年下どちらが好みですか？」

「・・・年下かな。」

「年下ですか。なるほど。」

年上と答えるところだったが、逆の年下と答えておいた。

年上って言っても六つ違いだけだね。

年下の加藤くんとは一つ違いか。

六つも違うとけっこうな時代差が出るもの。

当たり前だけど小学校入学の時点で相手は中学校入学だもの。

相手が働いた年に私はまだ中学三年だもの。

私が入社した時には既に八年目。

三年経った今では役職にもついている。

“~~~~~”

携帯が鳴る。

海の音に似合わない着信音。

「あ、電話どうぞ。」

「ううん、いいや。メールにしておく。」

「俺のことは気にしないでどうぞ。」

「うん、大丈夫。」

せっかく気を遣ってくれた加藤くんには悪いが、電話に出られる状況ではない。

電話に出られるはずがない。

だってその電話は加藤くんの元上司で不倫愛人関係にある相手。

まさにその人からだったのだから。

メールの作成画面を開くと同時に先にメールが届いた。
新着メール一件 啓志。

『電話まずいの？今どこ？』

『今皆で海。帰ったら電話するね。』

「佐岐さんメール返すの早い方ですか？」

「え？どうだろう・・・その時によるかな？」

「そうですか・・・。」

加藤くんと話している間にも既に次のメールが届いていた。

『皆って誰？』

『同期二人と加藤くんと小林さんと新人二人だよ。』

加藤くんには悪いが話を聞きながらメールを打つ。

「人と話している時は携帯を見るな」それが啓志の口癖だ。
それなのにメールを返す自分って・・・

『ふーん、穂澄酒飲んでる？』

『飲んでないよ。お菓子食べてる。』

啓志の質問攻めメールは続く。

もう慣れたが、啓志からは疑問系で終わるメールが多い。

それを無視する返信をしようものなら後で何倍も攻められる。

そうならなかったためにも面倒くさくても素直に一つずつ答えていくことが大事だ。

面倒くさいだんて言おうものなら後が恐ろしい。
これ、啓志との付き合いで学んだこと。

『帰り遅くなるの?』

『終電までには帰るよ。』

時計を見ると八時半。

終電までには帰る。これも啓志と決めたこと。

一人暮らしの私は遅くなると連絡を入れる必要もなければ、終電までに帰る必要もない。

だが、啓志と決めたことだから。

啓志との決め事は他にもある。

- 一・帰ったら必ず電話をする
- 二・メールの返事はすぐにする
- 三・お互いの予定を伝える

「佐岐さんはどんなタイプの人が好きですか?」

「うーん・・・相手を尊重してくれる人、穏やかな人かな。」

「では、苦手なタイプはありますか?」

「自己主張が強く嫉妬深い人。」

「なるほど・・・」

加藤くんに聞かれたこと、つい本気で答えてしまった。

確かに啓志は自己主張が強いから私の言うことはあまり聞いてくれない。

独占欲強い嫉妬深いから男友達と遊ぶのはあまり良く思ってくれない。

決して穏やかではない、見た目も性格も強くてキツイ印象だ。それでも・・・

好きになってしまったのだな。

啓志と付き合って一年半。

今では居なくてはならない存在だ。

“ブー、ブー、ブー”

着信音からバイブに変えた携帯が鳴る。

『今日花火大会は行かなかったの？』

『行かなかったよ。海になった。』

すぐに返す返信メールに本音を書くのはやめた。

本当は今日の花火大会、啓志と行きたかったんだよ。

夏の始まりを一番に伝えてくれる花火大会は毎年六月に行われる。前々から知ってたんだ。今日あるのは。

でも、啓志から聞いた予定では今日は会える日ではなかったから。

不倫愛人関係。

啓志は結婚している。

子供はいないが奥さんはいる。

共働きで夜勤の仕事が多い奥さんとは生活形態が違っらしいが。

それでも夫婦は夫婦だ。

今日は奥さんが休みの日だったから。

夜、会うことは叶わなかった。

不倫愛人のルール。

良くある話だが、自分達にはあまり関係ないと思っていた。

その1・仕事が終わる、家庭に帰ったら電話もメールもしない。これが当てはまらないのが啓志。家に帰っても奥さんはいないのだから電話もメールもし放題だ。

その2・お泊りは難しい。

これも見事にこなしている。

啓志は一人暮らしの私の家に泊まるし、啓志の家にも数回入れてもらったことがある。

夜勤の奥様は夜もないから。

だから、あまり寂しい思いをしたことがない。

夜になると一人というわけではなく、望めば啓志と一緒にいてくれるのだから。

恋人のように・・・

その3・相手と自分の状況を理解すること。

相手が結婚している時点で恋人ではなく愛人。

奥さんにやきもち焼いたり、後々恨み言を言うくらいであれば最初から付き合うのはやめたほうが良いと思っているくらい。

自分でその人を選んだのなら文句は言わない。

文句言うくらいなら最初から不倫はしていない。

啓志を好きになってしまったこと、後悔したことはない。

世間からしたら不倫や愛人関係は許されることではないと十分にわかっている。

でも、誰に迷惑かけた？

私は啓志と結婚したいと思っているわけではない。

奥さんから奪おうなんて勇氣はこれっぽっちもない。

ただ、啓志の存在が必要なだけ。

あの時から、啓志の存在に救われただけ。

あの日から、啓志を好きになってしまっただけ。

「俺、佐岐さんの事が好きです。」

「え？」

「その・・・なんというか、この間食事した時の佐岐さんが可愛く見えたというか・・・」

突然、加藤くんは何を言い出したのか理解が追いつかなかった。

食事・・・

そういえば半月程前、加藤くんと二人で食事をしたことを思い出す。
ああ、あれだ。

その日は啓志とうまくいなくて、一人で帰ろうと思ったところ加藤くんに誘われたのだった。

啓志は男友達と二人で食事だなんて許してくれるはずはなく、今まで断ってきたのだけれど、その日啓志と揉めて半ばヤケになっていた私は勢いに任せてオツケーを出したのだ。

加藤くんは会社同僚しかも後輩だから後々バレたとしても安敗だろうという卑怯な考えの下。

「か、可愛い？私が？まさか。」

「いえ、佐岐さんは可愛いです。正直仕事している佐岐さんは怖い・・・ですが、二人で会った時の佐岐さんはこう、意外というか・・・あ、良い意味で、女性らしく女の子らしく見えました・・・」

下を向き顔を赤く染めている加藤。

やはり二人で行ったのはまずかったか・・・

あの日いつものように皆も誘おうと思ったのだが、誰も都合がつかなかったのだった。

加藤と二人で食事をするのは初めてだった。もちろん、啓志と付き合ってから他男の人と二人で食事するのは避けていたが。

あの日、前日に啓志と揉め事をした。

些細なことだったのだから、意見の食い違いがあった。いつもは折れる私も譲らなかった。

どうしてかな。

この頃啓志との関係が崩れ始めていたのは確か。

毎日のように会っていた頃もあった。

仕事が終わりに、食事をして送ってもらった。

週末休みには必ず啓志が泊まりに来ていた。

それは始めの半年位で、徐々にお泊りの回数も減り、食事を一緒にとることも減った。

決定的だったのは部署移動があったこと。

四月。別々の配属先となった。

互いに新しい環境になり、忙しくもなった。

私にも後輩ができたし、教える立場に立った。

勤務形態も変わったから二人の休日が揃わなくなった。

それでも私は啓志に合わせていたつもりだった。

啓志との決め事、お互いの予定を伝える。

そんな中で食い違いが生じるようになったんだ。

「それで、皆さんと遊ぶ中でも佐岐さんと会うのが楽しみになって。仕事ではなく、プライベートの佐岐さんが好きになりました。」

「俺と付き合ってもらえませんか？」

仕事とは違う加藤くんの真剣な表情。

緊張しているせいから少し涙目になっている。

皆で遊ぶようになったのも今年から。

四月に部署移動があつて、入社以来別々だった同期生と三人で同じ部署になれた。

後輩も配属され、新入社員も入ってきた。

年の近い仲間が集まっていたから、すぐに飲み会をして仲良くなった。

同期生三人を中心に休日も遊ぶようになった。

ちょうど啓志と予定が合わなくなった頃。

啓志と会えない日は、皆で遊ぶのであつという間に埋まっていた。その中の一人、加藤くん。

まさか告白されるとは……

「あの……ね、えつと……」

「付き合ってもらえませんか？」

再び想いをぶつけてくれた加藤くんの直向き、一生懸命さが痛いほど伝わってくる。

だからこそ、きちんと応えなければ。

「ごめんなさい。今は誰ともつきあえない。」

「……はい……」

「加藤くんの事、嫌いじゃないし、食事した時も楽しかったよ。」

「……そうですか……」

「加藤くんは素敵な後輩だから。」

「……はい……」

告白と呼ばれるもの。

ちゃんと受けたのは二回目である。

しかも二回とも答えは決まっていたから・・・

断るのは初めてだった。

大丈夫かな、後先考えずに答えてしまったことを少し後悔している。
だって会社で顔を合わせるのだから。

この先もずっと仕事仲間なのだから・・・

啓志と同じだった。

会社の先輩、後輩。

入社してまもなく啓志と一緒に仕事をした。
始めから恐い先輩だった。

先輩方の中でも好きではない方だった。

三ヶ月して配属先が変わった。

啓志とは離れしばらく別の先輩方と仕事をした。

啓志とは忘年会やら新年会やら歓送迎会といった定例飲み会での席
が隣になることが多かった。

仕事以外で話すのは別に恐くはなかった。

オンとオフを切り替えるのがうまい人で、飲み会で話す啓志はおも
しろかったから。

啓志の話は聞いていて退屈しなかった。

年上だから。色々な経験もしている。

女性と話すのも上手い。

お酒も強くついこちらでも飲まされてしまう。

お酒が入ると楽しくなるものだ。

ある一つの行事が終わった打ち上げでの飲み会のこと。

珍しく啓志が上司に意見をぶつけていた。

日頃上司とも折り合いをうまく合わせるタイプの人間だったが、この日の啓志は違った。

隣の席の私もこの日は相手にされなかった。

だんだん話はエスカレートしていき、上司の意見はお説教へと変わっていた。

それでも尚、意見を張る啓志。

隣で聞いている私が苦しくなった。

仕事上でなく、啓志という人間そのものを批判し始めた上司。

聞くに耐えない言葉が飛び交う。

もうやめて！こんなの啓志じゃない。

これ以上啓志が傷つけられるのに耐えられなかった私は思いがけない行動に出た。

啓志の左小指をぎゅっと握った。

ビールのグラスを持つ右手。

空いた左手は膝の上に置かれていた。

あまり広くなかったベンチシート。

すぐ右横に、啓志の左手があつた。

誰にも気づかれないうちに、テーブルの下で啓志の小指と自分の小指を絡めた。

すぐに啓志は気づいた。

顔は見れなかったけれど、わかった。

向かいの人と話しながらも、わかった。

誰にも気づかれなかったけれど、わかった。

啓志が握り返してくれたから・・・

私達は少しの間小指をつないでいた。

右利きな私が右手を出すのは時間の問題だったのだが。

少しの時間で十分だった。

互いの気持ちを知るのには十分なきっかけだったのだから・・・

それから半月も経たないうちに啓志に休みの日の予定を聞かれた。

「わかりました。佐岐さん。突然すみませんでした・・・」
「・・・ううん。」

“ブー、ブー、ブー”
メール着信を知らせる振動がポケットの中から伝わる。
今は見ることはできない。

「佐岐さん、実は今日、先生に頼んでここへ連れてきてもらいました。」

「えっ？」

「すみません、佐岐さんを好きな事、皆さん知っています。」

「ええつつ?!」

「それで皆さん協力してくれて、ラーメンを食べに行っただです。」
「・・・・・・・・」

言葉にならなかった。

今日のこの時間は、この江ノ島は、加藤くんの告白のために用意されていただなんて。

知らなかったのは私だけ・・・

「俺は、皆さんに協力してもらわないと勇気が出ませんでした。すみません。でも、佐岐さんと話す時間をもらえて良かったです。」

「・・・うん・・・」

「今、先生に電話しますね。」

加藤が電話をかける間にポケットから携帯を取り出した。
新着メール一件 啓志

『皆と何の話してるの?』

やばいつ、受信から5分以上経っている。
返信を・・・

できるわけがない。

皆が戻ってくる足音と話し声が聞こえてきた。
編集集中のメールを閉じ、携帯をしまう。

「おーいつ。」

「よっ、お二人さん。」

「カトちゃんだめだったんだって?」

「あれ?カトちゃん泣いてないの?」

「加藤くん俺の胸を貸してやる!泣け」

二人が気まづくないように皆が盛り上げてくれているのがわかる。
加藤くんが皆に協力してもらったって言った時、正直皆に知られて
いるだなんて嫌だった。

何で皆にバラすかな。そう思った。

でも・・・

今になってわかる。

皆に話していたからこそ、私は救われた。

会社で顔を合わせるのだから。

この先もずっと仕事仲間なのだから・・・

皆に話すのだってきつと勇気があるだろう。
告白するのなんてもっと勇気があるだろう。
加藤くんの配慮は嬉しかった。

「よしっ、では涙で海が荒れる前に帰るか」

「そだな。」

「車まで競争」

「最後の奴全員のジューズおごり！」

「位置についてー、用意——」

「きゃあゝ先生、待って！」

「私サンダルだよ」

「ドンっ!!」

一斉に走り出す七人の足音。

一人足らずとも皆真剣な表情。

砂浜に足をとられてうまく走れないけれど・・・
後悔はしていない。

あの日、啓志と指をつないだこと。

あの日、啓志とデートをしたこと。

あの日、啓志と手をつないだこと。

あの日、啓志と腕を組んだこと。

あの日、啓志とキスをしたこと。

あの日、啓志と一つになったこと・・・

ほんとね、どこかで気づいていたんだ。

こうやって、皆で遊ぶ時間が楽しいことに。

友達と遊んだり、家族と過ごしたり、恋人とデートしたり・・・

そんな当たり前なふつうの生活を送りたいと思っていることに。

ねえ、啓志。

今日、花火大会一緒に行きたかったね。

付き合い始めた頃行つた時みたいに浴衣着て、手をつないで、カキ氷食べたかったね。

デートはいつも市外を選んだ。

食事のお店も仕事場から離れた所。

手をつなぐのも人目を気にして。

啓志と初めて行つた北海道旅行、楽しかったね。

飛行機から二人の時間が始まって、三日間ずっと手をつないでいたね。

遠くに行くと、啓志とふつうの恋人になれるのが嬉しかったよ。

啓志の隣を歩く時は決まって右側。

つなぐのは右手。

右側が私のポジション。

私の居場所。

温かいところ。

心地良いところ。

甘えられるところ。

でもね、決して左側には近づけないの。

左側には・・・左手には・・・

それでも啓志はクリスマスプレゼントに選んでくれた。

お揃いの指輪。

色違いのペアリング。

私は左手に、啓志は右手中指に。

いつもつなぐ手に感じる中指のリング。

つないだ手は温かいのに・・・

リングはいつまでの冷たいままだね・・・

「ゴオオールー!!」

「一着」

「二着ー!」

「はあ、はあ、さ、三着・・・」

「ひーっ、疲れた・・・」

「やばっ、体力無いし。」

「ふーっ。全力疾走はきついね。」

皆それぞれの走りに限界を感じていた。

でも、走ったお陰で雰囲気が変わっていた。

「よしっ、皆乗り込め!一着のリッキーは特賞として助手席だ!」

「先生ー!ジューズは?」

「近くに自販機ないからコンビニまで車だ。」

「はあ、もうダメ。早くコンビニ。」

「じゃあ俺後ろ席。」

皆へトへトになって先生の車に乗り込んだ。

先生の車は八人乗り三列シートのおデッセイ。

三列目に新人二人が座った。

二列目に、両側から私と加藤くんが乗り込み、真ん中に小林さんを挟んだ。

皆で乗り込み出発！・・・と思ったのに・・・

「先生、俺江ノ電マニアなんで乗って帰ります！チャオ！」

「カトちゃん?!」

小林さんのかけた声も届かず、加藤くんはあっという間に鞆を持って降りてしまった。

「じゃあ、俺も歩いて帰るわ。」

「おお、リッキーまたな。」

続いてリッキーも降りた。

先生はアクセルを踏んで車を進めた。

車内は静かになった。

誰もしゃべる者はいなかった・・・

さっきまでの賑やかな雰囲気は海が見えなくなると同時に消えていた。

「よしっ、誰んちから行こうか？」

「はい、先生！うちが一番近いです。」

「ラジャー！有能なナビくんに任せて皆はこれを見ていなさい。」

気を利かせてくれたようで、先生は車内にDVDを再生してくれた。これなら誰もしゃべらなくて済むから……

結局、皆が加藤くんの気持ちを知っていたからと言っても、その本人がいないのではどうしようもない。

何をしゃべっていいかもわからないのだろう。しばらくDVDを観ることにした。

時計は十時をまわっていた。

江ノ島から近かった新人二人が降りたオデッセイには、先生と小林さんと三人が残された。

先生と小林さんは少し会話を始めていた。

今日の状況に、一番ついていけなかったのは新人二人だろう。入社してまだ三ヶ月。

仲良くなったとはいえ、先輩達とこんな風な時間を過ごすことになるとは大変困らせてしまった。

複雑な立場にいるのが小林さんだろう。

小林さんは加藤くんと同期入社。

今日は先輩、後輩の間に挟まれた上に、同期生が先輩への告白。

そして結果につながらない……

同じ女性としても何と声をかけたらいいのか困らせてしまっただろう。

どうしてこんなことになってしまったのか……
考え始めてしまった。

後悔はしていない。
でも……

今日、ここに来なければ良かったのか。
皆と遊ばなければ良かったのか……
私に加藤さんと食事に行かなければ……
加藤くんが私を好きにならなければ……

ううん、違うよね。

そんなの自分勝手。

自己中心的な考えはしたくない。

人を好きになる気持ちは誰にだってある。

誰を好きになるかも、いつ好きになるかも人それぞれ。

恋愛は自由なのだから。

そしてその想いは大切なものだから。

想いを伝えようと、伝えなくても……

その想いが叶おうとも、叶わなくても……

啓志とのデートは好きだった。

年上と付き合うのが初めてだった私にとっては大変満足のいくものだった。

大人のデート。

啓志は地元生まれ、地元育ちだから色々なところを知っていた。

もちろん過去に何人かの女性とデートを重ねているのだから女性の喜ぶところは押さえてある。

それを隠さずに、出さずに連れて行ってくれる。

田舎育ちで一人暮らしな私にとって、車に乗せてもらえるのも嬉しい

かった。

車は二人だけの空間を作ってくれる。
手をつないで、おしゃべりをして、キスをする・・・

夜景を見に行つて、遊園地に行つて、映画館に行つて、旅行に行つて・・・

道中、車で寄るところは一つ。

車を置いて、二人で愛し合った。

帰り際、いつもキスをしてくれた。

啓志のキスは心のこもったキス。

初めてキスをした時の事は今でも覚えている。

こんなにも気持ちのこもったキスがあるのだと初めて知った。

何度してもドキドキする。

何度しても温かい。

何度しても慣れない。

そんなキスだった。

結婚していること、奥さんがいること、そついつのを思い出させないくらい、啓志に愛されていたのだと思う。

“ブーブー、ブーブー、ブーブー”

リズムの違う振動でハツとした。

メールの着信を知らせるものではなく、電話の着信を知らせる合図だった。

不在着信一件 啓志

や、やばいっ！

これはまずいぞっ！

そう思っている間もなく次の振動が来る。
まぎれもなく啓志だろう。

背中に冷たい汗をかいているのを感じた。

新着メール一件 啓志

『電話まずいの？今どこ？』

『ごめん、メール今二件来た！帰っている途中だよ』

慌ててメールを打つ。

返信を忘れていたなんて言えない。

絶対に言えない。

だから嘘をつく。

電波が悪かったから今、前のメールも合わせて届いたのだと。
こうすることがトラブルを招かない利口な答えなのだとする時学んだ。

不倫のルールがあるように、恋愛のルールだってある。

時には相手に知られたくないこと、知らない方が良いことだってある。

それが相手の為になるのなら。

それが自分の為になるのなら。

それがお互いの為になるのなら・・・

送信。

顔を上げると小林さんが先生に道を説明しているところだった。

『穂澄、今どこ？』

すぐにメールは返ってきた。

しかも、利口な考え方をやってのけた私は一つのミスをしたことに気づく。

啓志からは疑問系で終わるメールが多い。

それを無視する返信をしようものなら後で何倍も・・・攻められる。来た・・・

『江ノ島を出て、皆で横浜駅で降ろしてもらおうよ。』

何処を入れていなかったのだ・・・

再び着信メール。

『車で？横浜からは電車？』

啓志の質問メールを無視した場合、次に来るのはより詳細を求めるメール。

だからより面倒くさくしたくなければ、一回目で素直に答えておく方が数十倍楽・・・なのである。これも学んだこと。

『そうだよ。横浜から電車で帰るよ。』

そしてこのように復唱文のメール送ることが一番の安心・・・いや、納得につながっているのだ。

『わかった。気をつけて。帰ったら電話して下さい。』

ほらね。

そして、メールの文面から啓志のご機嫌までもがわかってしまう私

って・・・

絵文字、顔文字が多い時はご機嫌。
もちろん無い時は不機嫌。

敬語、丁寧語の時はもつと不機嫌。

あらあら。

これで不機嫌なのはわかったけれど、とりあえずメールのやりとりからは開放される。

帰ってちゃんと電話をすればご機嫌は直るし大丈夫。

啓志の事、ここまでわかっていてなぜ言わないの？

そう友達から言われたこともある。

まさか不倫愛人関係をしているとは言えないから、啓志は普通の年上の彼氏ということになっているのだが・・・。

友達に啓志の事、束縛とか独占欲が強すぎるとか言うことがある。

確かに、彼氏にここまで気を遣ってメールをしたり電話をしたりするのは珍しいのかもしれない。

でも、はじめに啓志と決めた事だから。

デートの時、啓志は必ず家まで送ってくれる。

啓志の家の方が近くても、回り道することになっても送ってくれる。
理由を聞いた。

二つあると啓志は言った。

一つは、安心のため。

別れた後で何かあったら嫌だから。家に帰るのを見届けることで安心するからだ。

二つ目は、一緒にいられるから。

送っていくことで、その時間、一緒にいられる時間が増えるからだ。

これを、一緒にいなかった日も、これから帰る連絡ではなく、家に帰った時に連絡が欲しいのだと言った。
安心のために。

だから啓志は一度家に帰った後、出かけるのを嫌う。

ちよつとコンビ二に・・・と思って携帯を家に置いたまま出かけたことがあった。

たまたま用事を言い忘れた啓志から着信があつて。
出ない私。
心配になつて車のエンジンをかけたとか・・・

啓志も同じ。

一度帰ったら家から出るのを嫌う。

前に一度、会社の同期生と飲み過ぎてしまい助けを求めたことがあった。

既に啓志は帰宅していて、電話には出てくれたが迎えに行く事には首を縦に振ってはくれなかった。

結局、電話で話している間に酔いを醒まし、終電に乗って帰った。

最寄り駅で電車を降りてから家に着くまでは耳が痛くなるほど受話器から説教を聞かされることとなつた・・・

それでも啓志のことが好き。

友達からは理解できないと賛否両論。

でも、私には啓志の存在が必要。

決めた事に忠実なもの、融通が利かないところも・・・

自分を持っている人だから。

強い志を持っている人だから。

人から言われたくらいで曲げたりしない、強い信のある、大人の人だから・・・

わがままを聞いてくれないのも、私を甘やかさないため。

間違っていることに対して指摘してくれる人だから。

ダメな事はダメと言ってくれる人だから。

人にも厳しいけれど、自分にも厳しい人だから。

そして・・・

なにより、出来たことを誉めてくれる人だから。

良い事は良いととびっきりの笑顔で、頭を撫でてくれる。

良く頑張ったねと言ってくれる。

優しい態度や、優しい言葉をかけてくれるのが優しさだけじゃない。

頑張った分だけ、認めてくれる、そんな優しさを持った人だから・・・

啓志を好きになったの・・・

「先生、ここです。着きました。」

「おうつ。じゃあ、また来週。」

「はい！ありがとうございます。」

小林さんちに着いたようだ。

時計を見ると11時になるところだった。

終電、乗らないとね。

この後、近い駅で降りてもらおう。

「佐岐さん、助手席に乗り換えてください。」

「え？」

「先生、ずっと運転だから。」

そう言うとお林さんは後部席から降りた。

「そだな、話し相手いないと眠くなりそうだな。」

運転席から先生に言われた。

そうか。皆降りて私が最後だものね。

後部席を降り、助手席へと乗り換えた。

外はひんやりしている。

六月といえどまだ夜は冷えるのだな。

助手席から窓を開けてお林さんに手を振る。
すると、再び窓に近づいてきた。

「佐岐さん。」

「うん？」

「今日のお藤くん、かつこ良かったですね。」

衝撃を受けた。

年下の子に、そんな風に言われるだなんて。

年下の子に、そんな風に言わせてしまっただなんて・・・

「お疲れ様でした。」

そう言うとお小さく頭を下げ、お林さんは帰っていった。
オデッセイが進む。

かつこ良かったですね・・・か。
涙でそう。

小林さんがどんな気持ちで言ったのか。
加藤くんがどんな気持ちで言ったのか。
いつも私は自分のことばかり。
自分のことしか考えていない。

車を降りた加藤くんを思い出す。

「江ノ電マニアなんで乗って帰ります」そう言ってドアを開けた。
一度は乗った車。

どんな想いで乗ったの？

皆でまた帰れると思っていた。

全員で来た道を帰るのだと思っていた。

一人で電車で帰る・・・

どんな想いで降りたの？

どんな想いでドアを開けたの？

荷物を持って・・・

いつ、車を降りようと決めたの？

最初から一人で帰ると決めていたの？

どんな想いでドアを閉めたの・・・

さつき起こった光景なのに・・・

目に焼きついて離れない。

車を降りた加藤くんの姿が・・・

車から見えた加藤くんの横顔が・・・

一つの考えが頭に浮かぶ。

“降りるべき者は私だったのではないか”

告白を知っていた皆。
振られた加藤くん。
振ったのは私。

そう、車に残るべきだったのは皆と加藤くん。
その為に皆知っていた。
加藤くんを励ますために。
車に残るのは加藤くん。

気を利かせられないどころか、何も気づいていない私。
配慮のかけらもなく、皆の雰囲気壊した私。
状況をわかっていない私。
自分勝手な私。

降りるべきだったのは私。
電車で帰るべきだったのは私。
私一人が・・・

限界だった。
そこまで考えると涙が溢れてもう我慢はできなかった。

突然、隣ですすり声を上げて泣き出したことに気づいた先生は、

「ほいつ、泣きグツツ。」

そう言うと、頭に帽子を深くかぶせてティッシュボックスを一箱投
げてくれた。

十分だった。

一人で泣くのは。
しばらくは溢れ出す涙を止めることができなかった。

ここで泣いていたのは加藤くんかもしれない。
ここで泣いて良かったのは加藤くんだった。

本当は、加藤くんがここで泣きたかったのかもしれない・・・

先生の横で、泣いていいの加藤くんだったの。

夜の車窓を映し出す窓。

暗過ぎて、反対に自分の顔が映っている。

酷い顔。

先生に貸してもらった帽子の鏝の下から泣きはらした醜い目が見える。

「落ち着いた？」

「・・・うん・・・」

「いっぱい泣きーや。」

「うん・・・」

先生に、こう声をかけてもらえたのは本当なら加藤くんだった。
先生に声をかけてもらえるべきは加藤くん。

そう思うと再び涙が込み上げてくる。

泣きそうになる。

でもこらえる。

泣かない。

もう、泣かない。

泣いていいのは加藤くん。

泣くべきなのは加藤くんなのだから。

「先生、一番近い駅で降ろして。」

これ以上先生と話すのが耐えられないので一回で希望を喋った。

「ん？この辺はもう終電危ういと思うぞ。」

「そつか・・・」

「家まで送るよ。」

「ん・・・悪いから・・・横浜で降ろしてもらえる？」

「おうつ。いいぞ。」

「・・・ごめんね。」

「なぜ謝る？」

「いや・・・だって、今日・・・」

そこまで言って、再び自分を振り返る。

皆に迷惑かけたな。

こうして先生にも送ってもらって。

借りていた帽子を外す。

涙と鼻水で散らかしたティッシュを一つにまとめる。

先生と話す気になれなかったので窓の外を見ていた。
それでもやっぱり思い出すは・・・

加藤くんの横顔。

先生の車の時計を見ると11時30分だった。
加藤くん、無事に家に着いたかな。

江ノ島から加藤くんの家、電車乗り継いだのかな。
いつもより長い乗車時間、一人で・・・
辛かったよね。

ごめんね。

一人にさせて。

一人になるべきは私だったのに。

私には先生がいる。

加藤くんというはずだった先生が。
本当に申し訳なく思う。

“ブーブー、ブーブー、”

バイブの音が聴こえる。

私じゃない。

先生が携帯を見てこう言った。

「カトちゃん家着いたって。」

その一言で十分だった。

再び涙に襲われた。

隣に先生がいることも忘れて・・・

思いつきり泣いた。

今度はすすり泣きではなく、声をあげて泣いた。

「ごめんね、先生。ごめんね・・・」

「私・・・ごめんね・・・ごめ・・・」

先生に謝りたかったのか、加藤くんに謝りたかったのか、それとも・

無我夢中で泣いてしまった。

「ほいつ、泣きグッツ。」

そう言うのと、再び頭に帽子を深くかぶせてくれた。

一人で泣きモードに入る。

でも、今度は違っていた。

「カトちゃんはさ、結果はどうあれ気持ちを伝えたかったんだよ。」

先生が話し始めた。

「おれらに相談してきた時はもう言いたくて限界みたいだったし。」

「まあ、それを止めずにじゃあ言っちゃいなよ〜ってセッティングしちゃったおれらが悪かったよな、ごめんな。」

“ごめんな”

先生のその言葉が痛いほど胸にささって・・・

「違うの！・・・謝るのは私・・・」

「だって・・・私・・・私は・・・」

「今ここにいるべきだったのは加藤くんだよ。加藤くんがいたら先生は私なんかに謝ることもなかった。ここにいていいのは加藤くんなんだよ。私が降りて電車で帰るべきだったのだよ！」

一気に喋ってしまった。

涙と鼻水の入り混じった声、しかも早口で何を言っているのか伝わらなかったかもしれない。

でも、車内でずっと溜め込んでいた事をはじめて口にした。

「そんは風に思っていたの。」

意外にも先生の声は落ち着いていた。

「佐岐さん、自分が降りれば良かったって思っていたのか。」

「だって・・・そうでしょ？」

はじめて先生の顔を見た。

運転しているから正面を見ているけれど、先生の表情は少しだけ笑っているように見えた。

「さっきのメール、リッキーから。」

「え？リッキー？」

「カトちゃんが降りた後、リッキーも降りたじゃん。」

「うん・・・」

「あん時に、リッキーがカトちゃん、おれが佐岐さんって決まったの。」

「え？」

「あうんの呼吸ってやつ？」

よくわからないけれど涙は止まっていた。

「別にどつちかが降りるべきだったなんて思っていないよ。カトちゃんが降りたのは自分の意思。佐岐さんにそうして欲しかったなんて

思っていないよ。」

「だって・・・皆は知っていたから・・・」

「確かに告白するのは知ってたけど、その後どうするかなんて全く考えてなかった。だから、勢いだけでやっちゃったおれらにも非はあるってわけ。」

「でも・・・」

そうだったんだ・・・

別に決まっていなかったのか。

でも、結果によってはカトちゃん励ます会とかでその後飲みに行くことだって出来たよね。

私がいなければ・・・

私が降りていれば・・・

「まだ気にしてんの？降りなかったこと。」

「うん・・・だってやっぱり私が・・・」

「佐岐さんて意外と溜め込むタイプなんだね。今日知った。」

「えっ？」

「そんだけカトちゃんの事想って、考えて、悩んで、泣いて・・・それで十分だと思うよ。」

うれしかった。

先生の言葉。

ずっと考えていた加藤くんに対する申し訳ないという気持ちが止まった気がした。

「後はさ、次の事を考えてあげればいいんじゃないかな。」

「次？」

「来週会った時にさ、普通にさ。それがカトちゃんが一番気にして
いると思うよ。普通に話せるかをさ。それは佐岐さんから頑張っ
てあげたら。」

告白を断った。

それでも会社で顔を合わせるのだから。

この先もずっと仕事仲間なのだから・・・

加藤さんの配慮が嬉しかった。

先生の言葉がうれしかった。

次は私の番。

「そうだよ。普通に・・・できるかなあ・・・」

語尾は不安になってしまった。

「できるよ。佐岐さんなら。そこまで泣いて想ってるんだから。」

「うん・・・」

「正直驚いたけど。」

「え？」

「佐岐さん泣くとは思ってなかった。」

「一つの告白で、そんなにも泣くとはすごいよ。しかも断ってだよ。」

「そ、そうかな・・・」

「断られたならわかるけど、断った方がそこまで泣くなんてさ・・・」

「こ、ごめん。そうだよ・・・」

ハッとした。

今になつてもう遅いが、かれこれ一時間は泣くのに付き合つてもらった。

隣で一時間も泣かれたら嫌だよね。

自分が泣かせたわけでもないのにそんな長く泣かれたら嫌だよね。普通。

恋人でもなんでもないただの会社同僚なのに。

先生こと綾瀬 竜斗。

あだ名が先生ね。

二年半前の新人研修で出会った。

その時はまだ同期が二人で、お互い違う部署で研修を受けていたから話すことはなかった。

四月になつて同期は四人に増えたけれど、皆それぞれ違う部署に配属されたので顔を合わせるのは飲み会くらいだった。

一度だけ同期飲みをやったかな。

二年目の配属では先生とリッキーは同じ部署になった。

三年目の今年、三人とも同じ部署になった。

飲み会や遊ぶ回数も増えていった。

先生はお酒を飲まないのでも車を出し、皆を駅まで送ってくれた。

先輩からも可愛がられ、後輩からも慕われる人気の同期をもったものだ。

「ごめんね、私泣き過ぎた・・・」

車内での自分を振り返って、恥ずかしさと空気を読めない申し訳なさで情けなさでいっぱいになった。

「いや、そういう意味じゃないよ。ただ意外だっただけ。佐岐さんが恋愛であんなに崩れるなんて。」

そう言う先生はニコッと笑って見せた。

そういえば。

飲んでいると恋愛の話はもちろん来る。

まさか啓志の事は話せないから、いつも適当にごまかしていたっけ。最近の後輩の恋愛相談が多かったから自分の事は話す機会もなく忘れていたけれど。

あれ。

先生にも彼女がいたはず。

といっても一年目の記憶だから今はどうかはわからない。

でも、これだけ皆と遊んでいたら・・・いないか？

「佐岐さんってさ、自分の話はしないけど人のこととなると真剣になるよね。」

「そ、そうかな？」

「後輩の恋愛話好きじゃん。」

「いや、あれは・・・」

「偉いなって思ってたよ。あれだけ人の話を真剣に聞いてやるのはさ。」

「はぁ・・・」

そんな風に思われていたなんて。

「でも、実は自分の話となると苦手なんだね。」

「えっ？」

一瞬、先生と目が合った。

先生と呼ばれているのは知っていた。

誰が呼び始めて、どうしてそんなあだ名がついたのかは知らない。
呼びやすいし、私も同じにそろえることにした。

ただ、今の言葉、表情。

いつもの明るくリーダーシップを発揮してムードメーカーな“先生”とは違った顔のように見えた。

確信に触れられなかった。

自分のこと。

自分の話。

啓志の事・・・

「まあ、もう泣き顔も見ただし？これから何かあったら言いなよ。あんまし溜め込まないでさ。」

「・・・うん。ありがとう。」

「しっかしこんな量ティッシュ使う人はじめて見た。」

「う、うるさいっ。」

「しかもそれけっこー前から車にあるのね。」

「え？」

「ホコリっぽくなかった？」

「ひどーいつ。」
「ハハハ！」

先生が話を切り替えてくれたので助かった。
涙はすっかり止まって笑顔が戻った。

啓志は私が泣くのも好きじゃない。

「自分のことで泣かれるなら必死でどうにかするけど別のことで泣かれてもどうにもできないよ」

啓志らしい意見である。

啓志と揉め事や喧嘩をする事もある。

たいがい、いや、そのほとんどは私が謝ることになるのだが。

決めた事に忠実で間違った事を嫌う啓志。

自分を持っている人だから。

強い志を持っている人だから。

言葉で啓志に勝てることはなかった。

けれど、自分の非は認める。

人にも厳しいけれど、自分にも厳しい人だから。

だから悪かった時は丁寧に謝ってくる。

抱きしめて、キスをして、二人を戻そうとしてくれる。

泣いていたら、泣かせてしまったらとっても大事にしてくれる。

ゆっくり頭を撫でて、ゆっくり愛してくれる。

泣いてしまった分、泣かせてしまった分の時間を取り戻すかのよう
に愛してくれる。

それが啓志。

でも、反対に啓志の前では泣かなくなった自分もいる。

仕事でミスをした時、友達や家族とうまくいかなかった時、悩んでいる時・・・

泣きたかった。

泣いてしまいたい時もあった。

それでも・・・

我慢した。

啓志という時は楽しくいたい。

笑っていたい。

愛し合っていたい。

啓志がそれを望んでいるなら・・・

だから涙は忘れていた。

先生の前であんなに泣くなんて。

自分でも驚いている。

いったい何年分の涙だろう。

そう考えるとなんだか可笑しくなってしまう。

先生には感謝。

いきなり泣き出した私を慰めるわけでもなく、問い直すわけでもなく、

帽子をかぶせてティッシュをくれた。

泣き顔気にしなくてもいいように帽子を。

たくさん泣いてもいいようにティッシュを。

一人で泣かせてくれた。

ありがとね。先生。

「佐岐さん、ここから道案内して。」

「えっ？」

「おれ佐岐さん家知らなかった・・・」

そう笑って言った先生。

笑えなかったのは自分。

「案内つてえっ？ええっ？」

「ここ右？左？」

「み、右！」

交差点に差し掛かっていたので慌てて答えたが。
よく見ると見慣れた交差点ではないか。
あれれ？家が近い・・・

「先生？！横浜駅は？」

「過ぎたよ。」

「あ、あれ？？いつの間に？」

泣いたり話したり反省したりしている間に・・・

「先生ごめんね。」

「何が？」

「泣いて迷惑かけた上に送ってもらうだなんて更にこれ以上のご迷惑を・・・」

「なんで？」

「だって先生んち家から遠いでしょ？横浜で降ろしてくれた方が早

く帰れたんじゃ・・・」

「佐岐さんいつも終電で帰るから知らないと思うけど、おれいつも皆送ってから帰るから平気だよ。」

「そうなの？」

「うん。最近皆終電気にしないようになったからさ、遊んだ日はいつも朝帰り。だから今日は早い方。」

「そうなんだ・・・あ、そこ左でお願い。」

いつも啓志に車で送ってもらうと降ろしてもらうのは近くのコンビニの前。

家の前がUターン禁止ということもあるのだけれど。

コンビニの駐車場に停めて、少し話してから帰る。

車の中は二人の世界。

人目を気にせず手をつないでいられる最後の時間。

キスをして、別れる。

車は見送らない。

ドアを閉めたら私はまっすぐ家に向かって歩く。

啓志の車が帰る所は決まっているから・・・

「先生、ここでいいよ。この先入るとUターンできないから。」

「いいよー、遠回りして帰るから。」

そう言つとオデッセイは家の前の道に入って行く。

「ここ。」

「すっげー、マンションじゃん。」

「古いし狭いけどね。」

「オートロック付き？」

「一応ね。」

「じゃあ安心だねー。」

そう言う先生はあくびを一つした。

「今日はありがとう。ごめんね。送ってくれてありがとう。」

「おおっ！」

「気をつけてね。」

「おうっ、じゃあまたな〜！」

オデッセイは来た道をUターンすることなく真っ直ぐ進んでいった。
見送っている自分がいた。

突き当りの道を右に曲がると遠回りして元の道に戻る。

遠く、オデッセイのウインカーが右に光っていることを確認した。

慌てて携帯を取り出した。

いつもの待ち受け画面。

着信も、メールも来てない。

ホッとするのも束の間、時計表示を見る。

0時30分。

間に合った……

ツーコールもしないでつながった。

「もしもし……」

「もしもし啓志、今着いたよ〜。」

「ん・・・終電乗れたの？」

「うん。乗ったよ。駅から歩いてきて今鍵開けるところ。」

車で送ってもらったことは言わない。

同期とはいえ、男の人に車で送ってもらったなんて言ったら啓志はひっかかるから。

トラブルを招かない利口な答えを私は選ぶ。

「タクシー乗らなかったの？」

「うん、今日は金曜日だからね。すごい並んでいたから歩いたよ。」

終電の時間、歩いて帰って来た時間、タクシーで着く時間・・・全て把握している。

それに合わせることで啓志が安心するなら。

決められた事を守ること、啓志が安心するから。

その為になら嘘をつく。

嘘をついてでも啓志の安心を守り抜く。

「じゃあこれから風呂？」

「うん。啓志はもう入った？」

「入ったよ。もう布団の中。テレビ見てる。」

「何見てるの？」

「10ちゃん。」

玄関で靴を脱ぎ、まずテレビのスイッチを入れる。
そしてリモコンで10ちゃんを選ぶ。

「ゴールシーン特集だね。」

「そう。これ見たら寝る。」

「じゃあ早めにお風呂入ってくるね。」

「ああ。寝る時メールちょうだい。」

「うん。お風呂行ってくるね。」

携帯をテーブルの上に置く。

付けたテレビを好きなチャンネルに変える。

10ちゃん。

さり気無く、何気無くだけれどこれは試されていると知っている。

ちゃんと家に帰ったか。

何を見ているかは言わない。

私が自分で答えを見つける。

その答えが正解ならもう電話は終わり。

安心の為の電話だから。

お風呂を済ませ、メールを送信。

『お風呂でたよ。啓志明日仕事頑張ってね!』

『穂澄は明日は家でのんびり?』

『うん。のんびり。夕方からお姉ちゃんのところ行って夕食一緒にするよ。』

『わかった。おやすみ。』

『おやすみなさい。』

これでおしまい。

いつもの流れ。いつものやり取り。

啓志は次の日仕事でも、私が帰るまで起きている。

おやすみメールが来るまで起きている。

以前、私は啓志の帰りを待てずに眠ってしまったことがあった。

起きていてもらいたい。

電話やメールで繋がることが安心。

一日のはじまりと終わりに穂澄と繋がっていられる手段だから。・

・そう啓志は言った。

完璧主義で、自分に厳しく他人にも厳しい。

自己主張の強いところはあるけれど、自分を持っている人、強い志を持っている人。

啓志。

だから私は啓志を好きになったの・・・

時計を見ると1時を過ぎていた。

「おやすみなさい」から「おはよう」までの自分の時間がはじまる。

季節：夏〜海〜（後書き）

夏はまだまだ続きます。夏の始まり、夏の思い出、涼しい夏・・・
もし良かったら続きも読んでみて下さい。

く 啓志 く a c t 1

友達

「穂澄、好きだよ。」

「私も・・・啓志が好き。」

愛し合う時、必ず啓志は言葉でも愛してくれる。

そんな毎回言われたら信憑性に欠けるとか、たまに言われるからこそ愛を感じるとか、友達からの意見はさまざま。

人の数だけ恋愛もある。

それでいいじゃないか。

今が幸せならそれで・・・

頂点に達した後、啓志はおでこにそっとキスをするとベッドから出て行く。

これもいつものこと。

薄明かりに灯るもう一つの灯火。

愛し合った後、啓志は必ず煙草を吸う。

煙草に火が灯ると次にベッドから感じるのは香り。

メンソールしか吸わない啓志の煙草の香り。

ソファーに座り、リモコンを持つ啓志。

チャンネルを選択している時の雑音が部屋中に響き渡る。

ほんとはね、ずっと一緒にいたい。

離れていたくない。

そのままベットに残っていつまでも抱き合っていたい。

腕枕をされたまま眠りにつきたい。

穏やかな眠りに・・・

「穂澄、来週はいつ会う？」

そう言つて脱いだ衣類に手をかけている啓志。

「うん・・・休みは土日だよ。」

「そっか、俺土日は仕事だ。」

服を着て煙草をくわえたまま洗面所へ向かう。
ドライヤーの音が聞こえてくる。

帰る準備。

そうわかるのに時間はかからなかった。

啓志は身のこなしもきちんとしている。

洋服もいつもしわ一つないきれいなもの。

着こなしも落ち着いている。

ホテルの洗面所で着衣を整えているところを見ると、今夜は奥さんがいるのだろう。

「じゃあ平日、俺木曜休みだから会うか？」

「うん。木曜日ね。仕事早く終わらせるね。」

私から、啓志の休みを聞くことはしなかった。
奥さんの休みを聞くことも。

啓志は必ず次会う日を決めてくれていたから。

「仕事なら迎えはいつもの公園でいい？」

「うん、公園まで歩いてくよ。」

啓志の自宅は私の仕事場から近い。

四月から部署移動で仕事場が別れたので出勤は別々なのだが。

とりあえず、誰がどこで見ているかわからないので私達は会社から離れて会っていた。

啓志の家も、私の家もあるのだけれど啓志は外で愛し合っのを好んだ。

車で入るこのホテルも何度も来ている。

「6時？7時？」

「うん・・・7時で。」

6時か7時かと選択肢を出されたら、当然遅い方の7時。
理由は二つ。

一つは、仕事が伸びた場合を考えてあらかじめ遅い時間に設定しておく方が安配。

二つ目は、待たせるよりも待つべし。

早く終わって余裕を持って啓志を待つことが好ましい。

啓志は待ち時間を嫌うからね。

「じゃあ木曜な。送ってくよ。」

「うん・・・」

慌てて服を着て用意をする。

時計を見るとまだ5時だった。

何時に帰ろうが、送っていくので啓志はあまり気にしていないみたい。

もう少し、一緒にいたかったな。

車が家の近くのコンビニに停まった。

「穂澄、夕食は？買ってくるの？」

「ううん、今日はいいや。」

「ちゃんと食えよ。」

そう言うのと啓志に頭をくしゃつとされた。

啓志の大きな手が髪に触れている。

啓志に頭を撫でられるのが好き。

啓志に髪に触られるのが好き。

啓志に触れられるのが好き。

啓志に抱きしめられるのが好き。

啓志にキスしてもらえるのが好き。

いつものように帰り際、車の中でキスをした。

「あ、そうだ。話すことあったんだ。」

「何？」

車から降りようとドアノブに手をかけた時だった。

「あ、大した事ないから後で電話する。」

別れ間際に思い出すなんて、帰るのを引き止めていると思われたくなかったのだ。

「駄目。今ここで話せ。」

腕を掴まれ助手席に引き戻された。

こうなってはもう後にも先にも引けない。

話さなければ変に思われてこの後余計面倒くさなるだろう。
後先考えず発言してしまった自分が悔やまれる。

「あのね、お姉ちゃん同棲していた彼氏と別れて、家出たらしいのね。それで家見つかるまで私の家に住みたいって。」

「いんじゃない。いつ言われたの？」

「先週の土曜。ご飯食べた時に。」

「そう。」

「だからね、啓志・・・しばらくうちにお泊りに来れなくなると思っ
うんだ。ごめんね。」

二人の会社から離れていた私の家は、時々啓志が泊まりに来ていた。
まだ同じ仕事場だった頃、同じシフト休みだった頃。

1Kだから決して広いわけではないが。

啓志がうちに泊まりに来るのは嬉しかった。

一緒にテレビを見て、一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入って、
一緒に寝る・・・。

朝起きて隣に啓志の寝顔を見た時、

朝ご飯と一緒に食べている時、

そのままデートに出かける時、

一日の始まりを啓志と過ごせることが嬉しかった。

「そう。わかった。」

返ってきた返事は意外とあっさりしていた。

啓志と付き合ってから、他の男を部屋に入れると言われた。

男友達も。遊ぶなら外で・・・もすぐに遊ばなくなったのだが。

「今、帰ったら姉さんいるかもなんだ。」

「うん・・・そうだね。」

「じゃあ、着いたらメールにするよ。」

「わかった。じゃあまたね。」

車を降りた。

見送りはせずまっすぐ家に向かって歩いた。

やっぱり今夜は奥さんが帰ってくるのだな。

そんなことを感じてても、別になんとも思わない私も冷めているのか
もしれないが。

啓志も・・・

お泊りの回数が減った。

仕事場が別々になったから？

休みが別々になったから？

なんだろう・・・この気持ち。

胸が重い。

苦しいとか痛いとかじゃなくて・・・

重い。こんな気持ちは初めて。

どよんと重たいよ。

一時間ほどして啓志から着いたと簡単なメールが届いた。

いつものような疑問系は無し。

私も簡単に返事を返す。

今夜はきつとあと一通のやり取りで終わりだろう。

おやすみメールだけで。

自分の時間が始まる。

その時だった。

“♪♪　　♪♪　　”

メール着信音。

あれ？と思い携帯を覗いた。

新着メール一件　里己谷　斐

リッキーからだった。

珍しい。

『おつす、海女。江ノ島は今日も穏やかだ。さて、先生から話は聞いた。悪かったな。カトちゃんの事。佐岐さんをそこまで悩ませるとは思わなくて。その後、カトちゃんとはどう？』

アドレスを交換して以来ではないかというくらい久々のメールは長文だった。

『どうって・・・話してないんだ。朝、挨拶しようとしてもいないんだよね。時間ずらされてるかな、避けられてるッぽいよ（<>）』

送信。

先週の金曜日、加藤くんから告白というものを受けた。

一人で帰って行った加藤くん。

申し訳なさでいっぱいだった。

翌月曜日、出勤したらまず挨拶を私からしようと決めていた。

これからも会社で顔を合わせるのだから。

この先もずっと仕事仲間なのだから・・・

告白を頑張った加藤くん。

今度は私が頑張る番。

そう思っていたのだが、朝、会うことはなかった。同じ仕事場とはいえ、早番・遅番と勤務形態もバラバラな上、出入りも多い仕事。

一日が始まるとなかなか顔を合わせることはない。

姿は見るものの、話しかける時間がなく。

火曜、水曜、木曜・・・

とあつという間に一週間が経ってしまい、加藤くと話すことはなかった。

そのうち一つの考えが浮かんだ。

避けられているのではないか・・・と。

告白してすぐに話すのは気まずいもしくは話したくない、顔も見たくない状況なのではないかと。

それではいくら私が頑張ろうにも・・・避けられているにはどうしようもない。

避けられるほど嫌われてしまったのではないかと不安でもあるが。

“ ♪ ♪ ♪、 ♪ ♪ ♪ ”

再びメール音が鳴る。

『そつか。カトちゃんにも時間が必要なのかもな。佐岐さんは平気？落ち込んだり悩んだりしてる？』

落ち込んだり悩んだり・・・

リッキーから未だかつてこんな風に言われたことはなかった。

リッキーこと里己谷 斐とも先生と同じ同期生。

先生とは対照的に物静かで知的な雰囲気の人。

ムードメーカーとは違うけれどその場で一番存在感のある人。

四月から同じ部署になり、遊ぶようになった。
先生からいったい何を聞いたのだろうか・・・
泣いたこと？

だよね、話したのか。先生が。
だから心配してくれるのかな。

『私は元気だよー！』

『泣いてすっきりしたとは思っけれど、これからは何かあったら相談しなよ、せつかくの同期なんだし。』

やっぱり泣いたこと聞いたのか。

先生のやつ、他の人にも喋ってるのかな。

でも、不思議と腹は立たなかった。

こうして、リッキーがメールをくれたことが、何よりの証だろう。
仕事メールもしたことのない私達が交わすメールは初めてにしては心強いものだった。

『また江ノ島から出直そうかな！』

送信。

『おっ、いいね！江ノ島来ちゃいなよ！いつ来る？あ、そうだ！山Pからも遊ばうって！』

『山P？！久しぶりだ、会いたい！』

山Pこと山下 梓もかつて同期の一人だった。
先生、リッキー、山P、私の四人が同期入社。
でも、山Pは四ヶ月で転職の道へ。

リッキー連絡とってたんだ。懐かしい。

『今月の俺ら研修の日、終わったら暇？』

鞆から手帳を出してきて開く。

六月最後の週の木曜日研修の予定が入っていた。
同期三人だけの研修だ。

『うん！ヒマだよ』

『じゃあ、そこ山Pと飲みで。』

『わかった。楽しみにしてる！』

心から、そう思っていた。

山Pに会えるまであと二週間少し・・・
手帳に新しく予定を書き込む。楽しみだな。

再び携帯を開き、リッキーからのメールにチェックを入れる。

“六件削除しますか？”

YESのボタンを押す。

同じく送信メールにもチェックを入れ削除。

啓志は携帯チェックをするから・・・。

最初は何気ない会話の延長上からだった。

ベットの上で鳴った携帯。

愛し合った後で良かった。

マナーモードにしておかなかったことを焦っていた。

「誰から？」そんな風に啓志に聞かれた。

「友達だよ」そんな風に答えてメールの返信をしようとしたら、隣で寝ていた啓志が突然覆いかぶさってきて。

キスされた。

何度も何度もキスされて。

携帯を持つ手から力が抜けるくらいキスをたくさんされて。

やがて携帯は手から落ちていた。

もう一度二人は一つに重なっていた。

「さっきの見ていい？」

ベットにそのまま置いてあった携帯を啓志が手に取った。

「うん？メール？」

私の返事を聞く前に、既に開かれていたが。

「ふーん、ほんとに友達からか。」

「なんで？嘘ついたと思ったの？」

「うん。」

「えー、啓志私の事信用してないの？」

「携帯見ても動じない穂澄は信用する。」

「なにそれ」

そんな会話から啓志は時々私の携帯を見るようになった。

私も別に嫌ではなかった。

特にやましいこともなかったし。

男友達もいなかったし。

メールといえば友達か仕事か家族だったから・・・

啓志が安心するならそれで良かった。

私は恐くて見れない。

啓志の携帯を見たと思ったことがない。

だって……

奥さんとのメールなんて見てしまったらそれは別れを意味することだと思うから。

啓志が結婚していること、奥さんがいることが気にならないくらい愛してくれている啓志。そんな啓志との恋愛をしている限り大丈夫。

矛盾・・

してるかもしれないけれど。

啓志が見るかもしれないから、

啓志が不快に思うかもしれないから、

啓志が不安になるかもしれないから、

リッキーとのメールは削除した。

く友達く a c t 2

2 .

翌月曜が始まった。

六月も二週目となると蒸し暑くなってきた。

今週こそは加藤くんに話しかけよう。

まずはきっかけとなる挨拶から。

そんな風に思っていた。

待ち伏せしてるのも変だしな。

朝礼の前に自販機の前でジュースを飲みながら悩んでいた。

「おはよ。」

一瞬驚いたが、後ろから声をかけてきたのは先生だった。

「おはよう。」

挨拶を返したものの表情は冴えない。

「どう？カトちゃんと話せた？」

「ううー、まだなんだよね。」

「そっか」

先生の表情はいつもと変わらない。
ジュースを買って隣に座る。

「土曜バーベキューしないか？」

「バーベキューかぁ。おいしそう。」

「カトちゃんも誘ってさ。」

「ほんと?!」

「話せるといいな。」

「来てくれるかなぁ・・・」

「来るだろ。」

「うん・・・」

始業のチャイムが鳴る。

朝礼に向かった。

加藤くんの姿を探す。

今日はいた。

朝礼に出ていた。

終わったら、話しかけよう。

挨拶してみよう。

「今日も一日よろしく願います。」

一礼をし、朝礼が終わる。

加藤くんの後ろ姿を目で追う。

廊下を進む距離を少しずつ狭めていく。

追いついたら、「おはよう」って、元気に挨拶しよう。

もう少し・・・

あと少し・・・

二人の距離が二メートルまで近づいた。
声をかけようとしたその時だった。

「おはよう！」

後ろから元気な声をかけられてしまった。
聞き覚えのある、声・・・

「おは、おはようございます。」

慌てて挨拶を返す。

「朝礼終わったか？」

「は、はい。終わりました。」

「丁度良かった、おーいつ、加藤！」

そう、加藤くんの元上司であり、私の交際相手でもある浅野 啓志。
啓志が来ていたのだった。

「加藤、久しぶりだな。仕事やってるか？」

「浅野さん、おはようございます。」

「そうか、そうか。いや懐かしいな。」

「異動してまだ二ヶ月じゃないですか。」

「いや、仕事場が変わるとなると違うもんなのだよ。加藤も来るか？」

「いえ、遠慮します。うちここからの方が近いんで。」

「言ったなく、俺んちもこっちの方が近いんだぞ。」

「・・・知ってます。」

「まあ、今度飲み行こうな。」

「はい。ではまた・・・失礼します。」

そう言つと加藤は行ってしまった。

廊下に残されたのは二人・・・

「朝から穂澄に会えるとはラッキーだな。」

「ちよつ、浅野さんっ！」

廊下に誰もいないのを確認する。

「きよ、今日はどうしたのですか？」

つい、小声になってしまう。

「なんだよ、穂澄は嬉しくないのか？」

「浅野さんっ ×」

「大丈夫だつて。誰もいねーよ。」

そう言つて笑つてみせる啓志の表情には余裕があつた。

私達は当然ながら仕事場では上司と部下。

四月の異動がある前までの二年間は同じ建物で働いていた。

廊下ですれ違う時、お昼の時間が一緒になる時、帰りが同じになる

時、いつもドキドキしていた。
半分は啓志に会えたドキドキ。
もう半分は誰かにバレていないかのドキドキ。

啓志は背が高いから目立つ。

おまけにカラーで髪は明るく、30過ぎの年相応には見えない。
こんな事本人の前では言えないが・・・

「今日は資料借りに来たんだ。」

「そ、そうでしたか・・・」

「なんだよ穂澄、つれないな。」

「×・・・」

冷や汗。

背中に冷たい何かを感じていた。

つい二ヶ月前までは、同じ建物にいるのが当たり前だったから。
意識していた。

廊下で、食堂で、玄関で。

啓志の姿を目で追ってしまう。

啓志も目を合わせ、微笑んでくれる。

言葉は交わさなくても伝わってくる想い。

特別、社内では話さないようにしていたわけでもない。
逆に仲が良い方だっただろう。

啓志とつきあうことになった時、仕事場でも今まで通りにしようと
言われた。

急に態度を変えるのも変だし、二人で食事をしているのを見られた

としても、仲の良い上司と部下なら有りうる話だろう・・・と。

啓志と離れたこの四月から、意識しなくなった。

廊下で、食堂で、玄関で。

そこに啓志の姿はなかったから。

最初は寂しかった。

寂しかったよ。啓志の姿がないことに。

今までは仕事に来れば会えるのだから。

デートできない日が続いても、仕事で啓志に会えたから。

どんなに仕事が忙しくても、啓志の顔を見ると安心したな。

でもね、四月、五月と目まぐるしく忙しかった。

仕事が忙し過ぎて思い出に浸る時間はなかった。

だからかな。

六月に入って落ち着いた頃、啓志がやって来て。

もう、ずっと別々のところで働いていた・・・そんな錯覚に陥っていた。

「俺、そろそろ戻るわ。」

「うん。」

「木曜な。」

そつ、最後に小声で言い残して啓志は歩いて行った。

「木曜な」耳に残る啓志の声。

なんだか嬉しくて、恥ずかしくて、耳が赤くなっていくのがわかった。

今日も一日仕事がんばるぞっ！

そんな気合を入れたハズが・・・

あれれ??

頑張るのは私だった！

そうだった！

今日は、今日こそは加藤くんに話しかけよう・・・

思い出してがつくり肩を落とした。

加藤くんに話しかけようと・・・

廊下を歩いて距離を縮めて・・・

啓志と会った。

廊下で。

そして・・・

啓志と話していたら加藤くんは去ってしまった。

せつかくの話しかけるチャンスを・・・

私は自分で台無しにしてしまったのだった。

そして、そのチャンスは再び訪れることは難しかった。

次の日も、その次の日も加藤くんと接触することはできなかったの
である。

自分で作ったチャンスを、自分によって逃してしまう・・・
それをもう一度望むにはいつたい何日かかるのか・・・

教訓：一度逃したものを取り返すのには倍の労力を必要とする。

そんな教訓を実感している場合ではなかったのだ。

はあ。加藤くん・・・

やっぱり私とはまだ話したくない？

それともきっかけがないだけ？

私が勇気を出さなきゃね。

たくさん勇気と辛い思いをさせてしまった加藤くん。

土曜日のバーベキュー、来てくれるかなあ。

〜啓志〜 a c t 3

3 .

公園沿いの通りに一台の車が停まっていた。

「ごめんね、啓志。待った？」

その車に慌てて駆け寄る。

「いや、さっき着いたところ。」

時計を見ると6時50分。

待ち合わせの時間には十分間に合っていた。

「穂澄、お疲れ。」

そう言うと、助手席に乗り込んだ私にキスをくれる。
軽いキス。

そして少しの間体を重ねる。

「おなかすいてる？」

「ううん、まだ大丈夫だよ。」

抱き合った後、啓志の言葉で次の行動が決まる。
今日は食事だな。

啓志とは車で待ち合わせるのが大半。
車の中で、啓志がたくさん喋り始めた時はそのままドライブ。

映画の話をしたら映画館。

たくさんキスをされた時はホテル。

どこ行きたいかと聞かれた時は私の行きたいお店や場所でデートする。

そんな啓志との付き合いはもう一年半になる。

「じゃ、穂澄んちの方行つてから食べるか。」

「うん、いいよ。」

仕事が終わりに、疲れた体で啓志と会うのはなんだか恥ずかしい。

前まではお互いの休みが土日中心だったから合わせて会っていた。

前日から来ていく洋服を悩んだり、服に合わせてバックやアクセサリ、髪型までも時間をかけていた。

そうすることも楽しい時間だったのかもしれないね。

でも、四月からは勤務シフトがバラバラになった。

お互いの休みが合うのは月に二回か三回、あるかないか。

だからどちらかの休みにあわせると、どちらかは仕事終わりとなる。

さすがに仕事終わりは化粧も崩れているし髪形も仕事用だ。

服もバックもアクセサリも合わせることも難しい。

「それ、この間買ったピアス？」

啓志の手が耳たぶに触れる。

「そうだよ。啓志に選んでもらったよね。」

「穂澄に良く似合ってる。」

啓志は私のことを良く見てくれている。

いい意味で言えば、可愛がってくれ、大事にしてくれる。
ただ、捉え方を変えればよく見られているから緊張もするし失敗も
できない。

啓志好みのメイクや洋服、髪型、アクセサリーまで……。

啓志は全てを見ているから、気が抜けない。

「穂澄、こっち向いて。」

「ん？」

信号で停まった時、渋滞で停まった時、啓志はキスをする。
恥ずかしくていつも下を向いてしまう私。

それを見ている啓志の視線が痛いくらいに突き刺さる。

「可愛いな。」

「えっ?!」

「キスの一つで照れてるところ。」

「う、うるさいなあ。」

精一杯の強がりも、啓志は見抜いて笑っている。

可愛いと言葉にしてくれ、本当に可愛がってくれる啓志に大人の余裕を感じる。

「佐岐さんは可愛いです」その言葉を急に思い出す。
可愛い……か。加藤くんにも言われたのだよね。

はあ。

結局今週も挨拶できずに木曜日。

月曜、加藤くんに話しかけようとした時、啓志と会った。

加藤くんよりも啓志をとってしまった私。

火曜、水曜と接触に失敗した。

そして今日は休みで会えなかったし。

どうしようかな・・・

このまま気まずいままなのかな・・・

そんなの嫌。

これから仕事仲間として、やらなきゃいけないこともたくさんある。

加藤くんからしたら私とは話したくないかもしれない、顔も見たくないかもしれない。

でも、たくさんの勇気を出してくれた加藤くん。
今度は私が頑張る番・・・なのに。

「食べないの？」

「えっ？」

「スープ、冷めるよ。」

啓志の声にハッと我に返った。
食事中だった。

・ 啓志と会っているのに、食事中なのに、考え事してしまうなんて・

今日はどうかしてるな。

「考え事？」

「えっ?!」

「そんな顔してる。」

スープを飲み終えた啓志がナプキンで口を拭きながら言った。
さすがだな・・・この人は。
表情読まれたか・・・。

「仕事？」

「う、ううん。」

「違うんだ。」

「あ、いや・・・その・・・」

まさか他の男に告白されて後が気まづくなっているなんて言えない。
しかも相手は後輩の加藤くんなんて口が裂けても言えない。
言えるわけがない。

「何？言えない事？」

「えっと・・・その・・・」

啓志は隠し事を嫌う。
いや、正確に言うと、隠せない隠し事を嫌う。

隠せないなら隠すな。
隠せるなら隠し通せ。

そんなしつかりとした考えの持ち主。
自分の意思をはっきり持っている人。
自分に厳しく、他人にも厳しい。
だめな事はだめと、良い事は良いと指摘してくれる人。
そこが啓志の尊敬するところでもある。

「言える事？言えない事？」

「あ・・・あのね、あの・・・」

啓志だったらこんな悩み、すぐに解決しちゃうんだろうな。

自分の意思を強く持っている人だから、人に流されることなんてないんだろうな。

例え告白されても、揺らいだりしない、きっぱり言える人なんだろうな。

そしてアフターケア、フォローも完璧にするんだろうな・・・

そうだ！

そうだよ！

ここにいるじゃない！

完璧な答えを持つ人が目の前に！

「あのね、啓志、と、友達のことなんだけどね・・・」
「悩み？」

「そう、悩み。友達の悩みを相談されてて・・・」

とっさに思いついた案。

友達からの相談事ということにして啓志にアドバイスをもらっちゃおう。

きっと、適格なアドバイスをくれるはず。

隠し事の苦手な私。

何でもないよって言っても啓志は信じてくれないだろう。
余計に怪しまれるだけ。

だったらこの場で相談してしまうことにした。

「私まで考えちゃってさ。自分だったらどうするかな・・・って。」

「ふーん。」

「啓志だったらどうする？」

メインのパスタが運ばれてきた。

続けて話を進める。

「どんな話？」

「あのね、告白を断ったら気まづくなつて挨拶も出来なくなっちゃったの。どうしたらいいと思う？」

啓志はフォークにパスタを巻きながら話を聞いてくれていた。

「一つ、気まづいままでは何か問題があるのか。二つ、彼女はこれからどうしたいのか。」

「え？」

短い即答に、思わず啓志の顔を見てしまった。

「つまり、告白を断っておきながらこれからどうするつもりなのか。気まぐれいままが嫌ならじゃあどこまで話せる仲に戻りたいのか。挨拶程度？世間話程度？これからお互いの恋愛を相談し合う仲？」
「えっと・・・」

「告白断っておきながら友達に戻りたいだなんていうのは図々しい話。振られた相手がそれを望むなら、そうしてあげるのが最もだと思っけど。」

フォークに巻いたパスタがするすると力抜けて解け落ちていく。

「それから、告った奴も。振られた時の事考えてあったのか。相手と気まぐれなるのわかって告ったならいいけど、相手がこうなってる悩むの知ってて告ったならそいつにも非はある。」

「結果、どっちにも責任はあるってこと。人が人に告るってことは責任がとれないなら告らない。受ける奴もそう。」

「告られるのなんて前兆でわかるんだから、責任とれないならほいほい出て行って受けないこと。以上。」

ぱっさり切られた・・・

思考回路切断。

無心に返る・・・

それからパスタを食べてデザートを食べたかどうかも覚えていない。

覚えているのは・・・

帰り際、家の近くのコンビニに停めた車内でいつものようにキスをした。

「穂澄、土日の休みは？」

いつものように予定を聞かれた。

「土曜日は会社の皆とバーベキューする。」

「ふーん。日曜は？」

「予定ないけどお姉ちゃんと買出しかな。」

「わかった。また電話する。」

そう言って別れた。

初めから、わかっていたこと。

啓志と討論すること自体間違っていた。

啓志と意見を言い合うなんて無理なこと。

啓志と話し合うなんて無理なこと。

啓志に相談するなんて・・・無理なこと。

啓志がアドバイスをくれるはずがない。

啓志にとつてのアドバイス・・・それはアドバイスではなく“方法”でしかないのだから。

起こってしまったことを悔やむより、起こさない努力をすること。
起こしてしまったことを悩むより、次の解決策にとりかかること。
解決策はこれとこれだからあとは自分で処理するように。

啓志の言った事は間違っていないだろう。

啓志の言った事は正しいのかもしれない。

でも、私には何が正しくて何が間違っているのか・・・それさえもわからないのだから。

自分の意見がなくて、人に流されやすい自分。

自分には物事を計る基準がなければ、方法も知らない。道具だって持っていない。

丸腰で戦っているようなもの。

でも、でもね。

誰にも・・・きつと、誰にも・・・
人の気持ちを量ることはできない。

そう思うよ。

く友達く a c t 4

4 .

土曜日。晴天。

「先生、やきそばはどうする？焼く？」

「やきそばは最後だろ」

「じゃんじゃん肉焼いちゃって」

「うわ、あちっ！」

「きゃー、油入れすぎたーはねるっ。」

「気をつけろよ」

皆でバーベキューに来ました。

「佐岐さん、切るの手伝いましょうか。」

「あ、ありがと。」

野菜切りを担当していると小村さんが来た。

「佐岐さんて一人暮らしなんですよ？ご飯とか作るんですよ？」

「はは、毎日は作らないよ。」

「えー、そうなんすか？包丁持つ姿似合ってるのに。」

小村に続いてやってきたのは新人の男の子、愛称さんちゃんこと三ノ宮くんです。

「さんちゃん、包丁持つ姿似合うつてあんまり嬉しくないよ。」

「そうだよ、さんちゃん、佐岐さんは何を着ても似合うつんだから！」

「小村先輩、ちょっと話がズレてません？」

「いーのっ。佐岐さんファン一号はあたしだからねっ。しょうがないからさんちゃんは二号にしてあげよう。」

「なんすか、それ。」

「あたしは入社した時から佐岐さんファンなんだからっ。」

「へえ〜。じゃあ、小村先輩まずは佐岐さんのように包丁持てるようになってないと。さっきからじゃが芋の身が減ってきてますよ。」

「う、うるさ〜いっ。」

ちよっぴり皮むきは苦手の様子な小村さんにさんちゃんのつつこみが入った。

確かにじゃが芋の身が・・・小さくなっていた。

そんな後輩の様子を微笑ましく見ていた。

「佐岐さん、野菜持っていいかしら？」

「あ。はい。終わりました〜。」

「じゃあ、こっち来て一緒に焼きましょ。小村さんも、さんちゃんも。」

「はあ〜い！」

焼きと聞いてか元気良く返事した小村さん。

三人で鉄板の方へ行った。

「おつ、野菜班ご苦労。」

「先生、見て下さい！このじゃが芋ね。」

「あつ、こらっ、さんちゃん！！」

さんちゃんが小村さんの剥いたじゃがいもを先生に見せようとするのを必死で止めている。

「はい、佐岐さんお箸。」

「あ、ありがとうございます。」

「じゃあ、焦がさないようにお願いね。」

「はいっ。」

一緒に焼こうと言ってくれたのは美雨さん。

美雨さんは八つ年上の大先輩。

美雨さんも別館で働いているのだけれど、こうして集まりには参加してくれる。

お世辞でないといつも言うのだけれど、とても八つ年上には見えな
い位可愛らしくてパワーのある人。

お料理上手で手作りのお菓子の差し入れを仕事場に持ってきてく
れたりする。

「そついえば、佐岐さんの実家ってどこ？」
「新潟です。」

「へえ。知らなかった。」
「あたしは知ってるよ。」

さんちゃん、小村さんが続いた。

「今頃まだ雪か？」

「先生、さすがにもう解けてるよ。」

「そうか。」

そう言つて、先生が味付けを始めた。

塩、コシヨウ、醤油を入れると、ジューと音を立てて醤油の焦げた香ばしい匂いがした。

どうやら鉄板の半分でチャーハンを作っていたらしい。

「うまそう。」

「先生すごい！」

「飯だ飯！」

「チャーハンだ。」

皆が匂いに誘われて集まってきた。

「先生料理上手い。」

「男の料理かっこいい！」

「早く食べて。」

「先生家で料理するんですか？」

「するよ、うち母ちゃんいないからね。」

何気無く、質問した事。

何気無く、言つた言葉。

返つて来た先生の言葉に一瞬皆の視線が凍りついた。

「そ、そうなんすか？」

「うん。出っけてからも結構経つよ。」

「す、すみません俺・・・」

「何で謝るゝばあゝかつ！」

「で、でも・・・」

「吹っ切れてなきゃそんな話ししねーよっ。ほらっ、皿出してそろそろ食べ始めようぜ！」

「は、はい。」

「お皿出して。」

「コップもね。」

「飲み物何にする？」

「何がある〜？」

「ビールにオレンジジュースとウーロン茶！」

「昼間から飲むのかよ〜。」

「いーじゃんっ、ビール最高！！！」

「乾杯ー！！！」

その後は先生の一言がかき消される位盛り上がった。

先生にお母さんがいない話しは初めてではなかった。

入社して、一度だけ開かれた同期の飲み会で。

先生はそう言っていたのを思い出した。

それでも、やっぱり当たり前のように忘れてしまっていた。それ位、先生は、そう思わせない位、先生は・・・。元気一杯で明るくて、ムードメーカー的な存在だったから。それだけじゃない。

配慮も上手いからいつも場の雰囲気を読んでいる。後輩を元気付けて、遊びに誘ってくれて、皆にとって面白くて頼りになる先輩だから。

私なんて・・・

今だ傷つけたままの人だっているのに。

バーベキューの片づけをしているとリッキーがやってきた。

「おっ、空いてないの発見。」

プシュっという音を立てて缶ビールを開けた。

「リッキー、ビール好きだね。温くない？」

「平気。」

「どうよ、その後カトちゃんとは。」

痛い質問。

答えに詰まっているとリッキーが先に口を開いた。

「今日も誘ったのだけだね。」

それだけ言っと、リッキーはビールを片手に去っていった。

わかってる。

このままじゃいけないこと。

自分から勇気を出さなければいけないこと。

自分が・・・

今日、この場に来なかった加藤くん。

来れなかった加藤くん。

来れないのは私がいるから。

私が・・・

泣くもんか。

泣いてどうする。

泣いてもなんの解決にもならない。

ふと、啓志に言われたことを思い出す。

“一つ、気まづいままでは何か問題があるのか。二つ、彼女はこれからどうしたいのか”

“告白断っておきながら友達に戻りたいだなんていうのは図々しい話”

加藤くん、あなたは何を望んでいますか？

友達、同僚、今までのように戻りたいと望んでいますか？
それとも・・・

もう、話したくはありませんか？
顔を見るのも嫌ですか？

私は、私は・・・

私はどうしたいのだろう。

結局、啓志に言われたことを否定できないのも、肯定できないのも、
自分がどうしたらいいのかわからないから。

うつん、わかっていないから。
考えようとしていないから。

どうしたら、加藤さんと話せる？
話すって何を？

話すってどんな風に？

私は何を望んでいるのだろう。

「——さん、佐岐さん。」

「佐岐さん？」

呼ばれる声で気がついた。

「あ、はい。」

「コンビニ寄るそうですよ。降ります？」

気がつくとも先生の車から皆が降りているところだった。

コンビニの駐車場に停められたオデッセイ。

荷物との間に座っていた小村さんが降りるためにはドア側の私が場所を譲る必要があったのだ。

「降りるね。」

「アイス食べたい。」

お財布だけ持って嬉しそうに降りた小村。

バーベキューが終わって先生の車に乗せてもらい、帰る途中だったのだ。

考え事していると時間が経つのはあっという間。

時計を見ると五時だった。

場所を見ると・・・

知らないところだった。

「あれ？どこどこ？」

「佐岐さん起きてましたよね？」

「うん、起きてた。」

「うちの近くのコンビニですよ。」

「えっ、もうそんなに？」

「はいっ、もうすぐうちです。次佐岐さんちですよ。」

ありゃりゃりゃ・・・。

すっかり起きていたのにもかかわらずだいぶ乗車してしまっていたのね。

ま、いつか。

時間も早いし、啓志には電車で帰ったことにすれば問題ないでしょ。同期とはいえ、男の人に車で送ってもらったとなると気にするだろうから。

幸い今日は奥さんがいる日だから連絡はメールで済ますことになる。もう少ししたらただいまのメールを入れておこう。

「じゃあ先生ありがとうございます」

「おうっ、またな。」

小村さんの家に着いた。

「佐岐さんは前に移動して下さいね」

そう言って小村さんが車を降りた。

ああ、そうか。

二人だけなのに前と後ろで話すのも変だよね。何も話さないのはもっと変だし。

後部座席から助手席へ乗り換えた。

「先生、まだ早いし横浜で降りてくれればいいからね。」
「おお、そうだな。」

「今日は昼からだったからさすがに朝帰りはないよね。」

そう言うと先生は笑っていた。

少しの間、先生と他愛の無い話しをしていた。

“ブー、ブー、ブー”

メールの着信を知らせる振動だった。

携帯を取り出す。

新着メール一件 啓志

『穂澄はまだ帰らないの?』

おっと。

携帯で時間を見ると六時だった。

仕事が終わったのだらう。

すぐに返事を送る。

『今電車乗ってるよ。啓志仕事お疲れさま。』

『仕事終わった。これから帰る。穂澄も着いたらメールしてな。』

『うん。気をつけて帰ってね。』

素早い対応をすることで問題にはならなかったようだ。

啓志からの連絡は徹底している。

仕事が終わった時、家に着いた時、必ず連絡をくれる。

まめな彼氏ね。そうも言われるが、監視されているみたい。とも言われたこともある。

お互いの安心のため。

啓志はそう言う。

私もそれで良いと思っていた。

啓志が安心するのなら、それでいいと・・・
思っていたんだ。

「メール。」

「えっ？」

「メール、してみたら？」

突然の先生の言葉に反射的に驚いてしまった。
啓志とメールしているのを知られたのかと思った。

「待つてるかもしれないよ。カトちゃん。」

「メールを？」

「そう。佐岐さんからのメール。」

加藤くんの事。

啓志から言われた事。

今日来なかった加藤くん。

今日行った私。

加藤くんから皆と遊ぶ時間を奪ったのは私だ。

私が皆と会つのをやめるべきだよな。
そしたら・・・加藤くんは来れるのだから。
皆と遊べるのだから。

「あ、そうだ。ごめんな、今日カトちゃん連れて来れなくて。メルしたんだけど・・・」

ごめんなって、先生が謝らないでよ。
先生が誘っても加藤くんは来ないよ。
来れないんだよ。

私が・・・

私がいるから。

来ないのでなくて、来れないんだよ。
だから先生は悪くないんだよ。

悪いのは私。

悪いのは・・・

「ほいつ、泣きグツツ。」

そう言つてティッシュが日一箱投げられた。
頭に帽子がかぶせられた。

いつの間にか涙ぐんでいるのを先生に気づかれたらしい。
その配慮が嬉しくて・・・

また泣いてしまったんだ。

「今日加藤くんが来なかったのは私のせいなの〜とかって思ってた。また。」

少しして、涙が止まった頃先生が言った。

「ううー、当たっているから言い返せない。」

「そんな事考えるよりさ、今度は佐岐さんから誘ってあげたら？来週も予定立てるから。」

「うん・・・。」

「来週は何して遊ぶ？海？山？川？」

「ははは。先生それ全部制覇するの？」

「当たり前だろ！今年の夏は長いぞ〜」

先生と話していると落ち着くのはなぜだろう。

先生と話していると泣いてしまうのはなぜだろう。

同期だから？

話しやすいから？

不覚にも、二度も同じ人の前で泣くことになってしまったなんて。最近の私、ダメだな。

久しぶりに泣いた先週から、涙腺弱くなっているのだろうか。

それとも・・・

先生のこと、加藤くんのこと、考えながらも、別のところで啓志のことを考え、行動に出ている自分がいる。

手に持った携帯の、指で打つ文字。

『ただいま。帰ったよ。バーベキューの匂いついたからお風呂に直行です。』

送信。

メールって、便利だけど会話じゃない。

文字って、現れているけれど会話じゃない。

本当の会話は、向き合って話さないと意味が無いんだ。

加藤くんが向き合って伝えてくれたように。

先生が向き合って話してくれているように。

そんなことを思う夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0834d/>

ユメウタ

2010年11月12日07時30分発行